

## 癌性髄膜炎にて発症した胆嚢癌の1剖検例

斎藤 興信<sup>1)</sup>・家田 学<sup>1)</sup>・富所 隆<sup>1)</sup>  
戸枝 一明<sup>1)</sup>・杉山 一教<sup>1)</sup>

表1 入院時検査成績(1)

### はじめに

固形癌を原発とする悪性腫瘍の髄膜浸潤は比較的稀とされている。今回著者らは、頭痛・嘔気・嘔吐で発症した胆嚢原発の癌性髄膜炎で、経過中に卵巣癌の合併を認めた症例を経験したので、若干の文献的考察を加え報告する。

### 症 例

患者：59歳，女性。

主訴：後頭部痛および嘔気，嘔吐。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：47歳時より高血圧。

現病歴：1985年3月より後頭部痛・嘔気・食思不振が出現，近医での鎮痛剤投与も無効で，7月2日当院を受診。項部硬直なし。上部消化管内視鏡上異常なし。一旦帰宅したが，7月3日夜より後頭部痛は激烈となり，7月4日再来。髄液中に異型細胞を認めたため，癌性髄膜炎の疑いで同日入院となった。

入院時現症：一般身体所見に異常を認めない。神経学的にも意識清明，言語・精神状態正常。髄膜刺激徴候陰性。脳神経障害なし。深部反射亢進なし。病的反射・運動知覚障害なし。

入院時検査成績(表1，表2)：血液・尿所見では，CRP(+)とCEA高値を認めた他は著変なし。髄液所見は，初圧180mm H<sub>2</sub>O，細胞数77/3(異型細胞27%)，タンパク30mg/dl，糖22mg/dl。細胞診はclass Vで，大型の粘液陽性の印環細胞を認めた(写真1)。眼底，頭部CTには異常を認めなかった。脳波所見は，7~9Hzのθ~slow

末梢血		腫瘍マーカー	
WBC	6000/mm <sup>3</sup>	CEA	131.7 ng/ml
RBC	418×10 <sup>3</sup> /mm <sup>3</sup>	AFP	3.0 ng/ml
Hb	12.7 g/dl	検 尿	
Ht	37.4 %	タンパク	(±)
Plat	15.3×10 <sup>4</sup> /mm <sup>3</sup>	糖	(-)
生化学		沈 渣	
GOT	20 K-U	赤血球	1~2/IF
GPT	16 K-U	白血球	4~5/IF
ALP	176 IU/ℓ	赤 沈	22/55
LDH	315 IU/ℓ	血清反応	
γ-GTP	19 IU/ℓ	CRP	(+)
ChE	6070 IU/ℓ	ASLO	100Todd
T. Bil	0.6 mg/dl	RA	(-)
T. Chol	179 mg/dl	HBsAg	(-)
T. G.	102 mg/dl	胸部X-P	異常なし
BUN	10.8 mg/dl	EKG	
Cre	0.9 mg/dl	非特異的ST-T変化	
Na	138 mEq/ℓ		
K	3.6 mEq/ℓ		
Cl	99 mEq/ℓ		
T. Prot.	7.5 g/dl		
(Alb	59.4 %)		

α波が優位で，laterality や focus は認めず，全体に意識レベルの低下した所見であった。

入院後経過(図1)：入院後意識レベルは変動し，髄膜刺激症状・尿失禁が出没した。髄液ドレナージ，総量49 Gyの全脳照射，メソトレキセート・キロサイド・プレドニンの髄腔内注入を行ない，7月下旬より意識・精神症候は改善した。原発巣の検索では，呼吸器・上部消化管・大腸・肝・膵・泌尿器に異常を認めなかった。ERCPで胆嚢は造影されず，総胆管の一部に狭窄を認めたが，総胆管癌や胆嚢癌の浸潤とは考えにくい所見

<sup>1)</sup>長岡中央総合病院内科





文 献

- 1) 高橋 昭：腫瘍の髄膜浸潤。内科，40：750～754，1977。
- 2) 荒木邦治ほか：髄液中のCEA， $\beta_2$ -MGが上昇を示し，かつ特異なCT像を示した胃癌原発のmeningeal carcinomatosisの1剖検例。最新医学，41：160～168，1986。
- 3) 金澤 新ほか：特異なCT所見を示した癌性髄膜炎の2例。臨牀放射線，27：759～762，1982。
- 4) 能勢忠男ほか：転移性脳腫瘍および癌性髄膜炎のcomputed tomographyの特長。CT研究，2：195～200，1980。
- 5) Enzmann, D. R., et al. : Computed tomography in leptomeningeal spread of tumor. J. Computer Assist. Tomogr., 2：448, 1978.
- 6) 元持雅男ほか：Carcinoembryonic antigen (CEA) 高値を示したmeningeal carcinomatosisの1例。神経内科，15：69～71，1981。
- 7) Yap, B. S., et al. : CSF carcinoembryonic antigen in meningeal carcinomatosis from breast cancer. J. A. M. A., 244：1601, 1980.
- 8) 佐藤能啓ほか：悪性腫瘍の髄膜浸潤における髄液中 $\beta_2$ -microglobulinの診断学的意義。神経内科，18：341～345，1983。
- 9) 沖中重雄ほか：肺癌の脳膜転移に関する研究。肺癌（第8回総会号）：20，1968。
- 10) 所 安夫：癌の脳転移。日本臨牀，20：2067, 1962。
- 11) 薄井紀子ほか：髄膜癌症で発症し，化学療法が奏効した胃癌の1症例。癌と化学療法，12：155～159，1985。
- 12) Gonzalez-Vitale, J. C., et al. : Meningeal carcinomatosis. Cancer, 37：2906, 1976。

写真の説明

- |   |  |
|---|--|
| <p>写真1 髄液細胞診。大型の粘液陽性の印環細胞。</p> <p>写真2 ERCP。胆嚢は造影されず，総胆管の一部に狭窄を認める。</p> <p>写真3 骨盤腔CT（7月24日）。子宮背側に径5 cmのcystic mass。</p> <p>写真4 骨盤腔CT（10月9日）。cystic massは腫大し，多胞性腫瘍として腹壁直下に移動。</p> | <p>写真5 卵巣穿刺液細胞診。漿液性嚢胞腺癌細胞。</p> <p>写真6 同上。</p> <p>写真7 胆嚢癌。印環細胞が多い。</p> <p>写真8 脳軟膜。印環細胞が多数認められる。</p> <p>写真9 卵巣の嚢胞腺癌。</p> <p>写真10 同上。腫瘍は表層にまで達し，ここには胆嚢癌の印環細胞も認められる。</p> |
|---|--|

写真-1

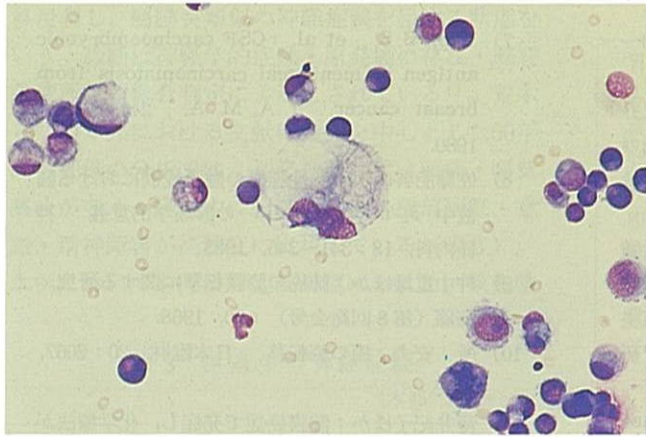


写真-2

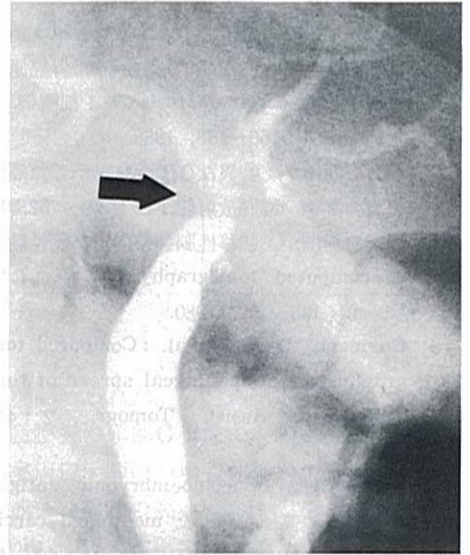


写真-3

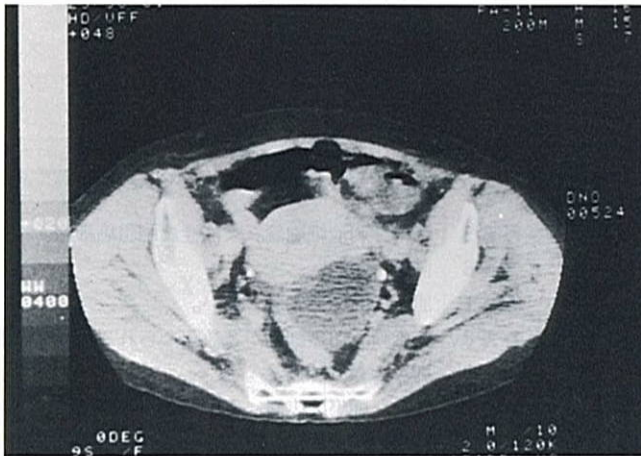
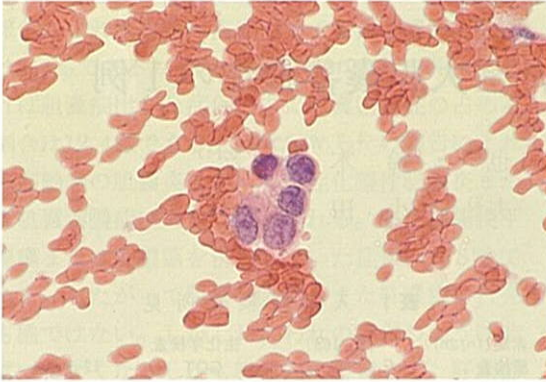


写真-4

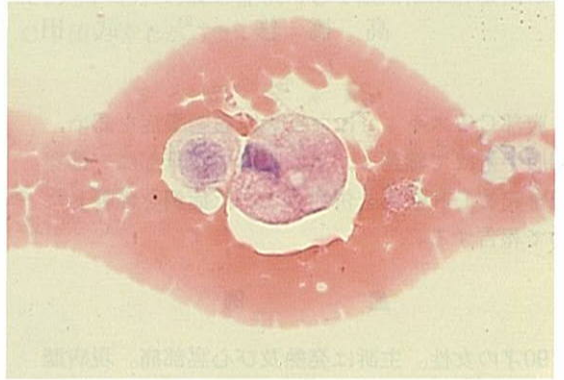




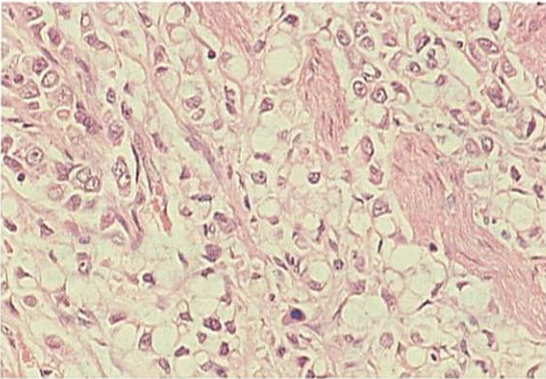
写真—5



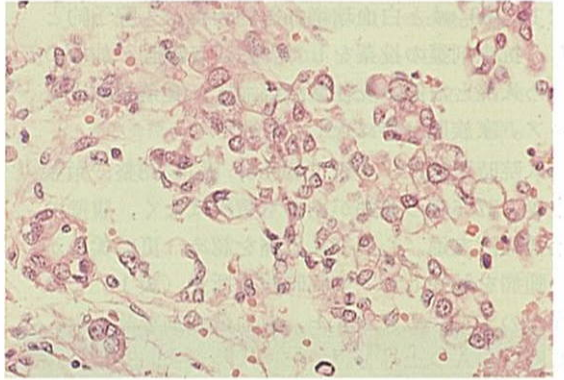
写真—6



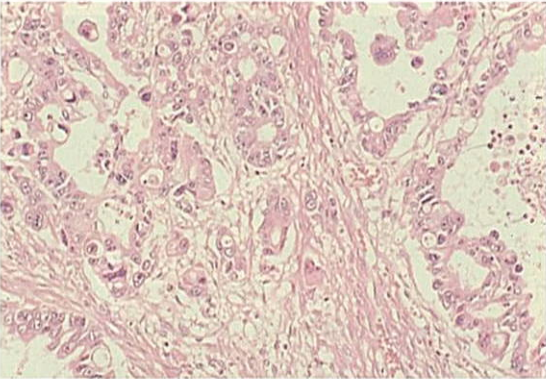
写真—7



写真—8



写真—9



写真—10

